あ　と　が　き

森　岡　正　博

本書は、国際日本文化研究センターの3年間の共同研究「生命と現代文明」の報告書である。私はいままで、いろんな研究会の企画運営に携わってきたが、こんなに大変だった研究会は、はじめてだ。

なにしろ、このテーマに関する現代日本の主要な若手研究者、それもどこかに異端の影を背負った人たちに集まってもらって、言いたい放題の議論を毎回毎回積み重ねてきたのだから。参加者のバックグランドをざっと見ても、美術史、宗教学、思想史、歴史学、法学、社会学、倫理学、女性学、文学論、文化人類学、医療人類学、科学史、科学社会学、生物学、医学、保健学、看護学、福祉論、環境学などなど、ほんとうに人文・社会・自然科学をまたにかけた人材がそろっている。

だから、どんなテーマで議論しても、発表した当人があっと驚くような斬新な視点がいつも誰かから提示されて、共同研究とはこういうものなのだと感嘆させられることがほんとうに多かった。それだけではなく、「自由」で「多元主義的」（柴谷篤弘氏の感想）な雰囲気の中で、人文・社会・自然科学の研究者たちが、時間を忘れて延々議論を続行することを通して、あらたな知の可能性が現在進行形でいまここで切り開かれているという興奮を何度も体験することとなった。そしてこの研究会は、日文研の他の共同研究の平均値と較べても、メンバーの出席率がかなり高く、また多彩な顔触れによる「何でもあり」のディスカッションの盛り上がりも壮観で、日文研の中でも異彩を放っていたプロジェクトであった。私はこの研究会の3年間の時空を、愛していたと思う。ほんとうに。

もちろん、議論のすれ違いもまた多かったわけで、錯綜する議論を強制的に交通整理する役を3年間やってみて、刺激の多い研究会ほど疲れもまた大きいということを身にしみて感じたわけである。だから、私のいまの気持ちは、「あしたのジョー」の最終回、灰になって燃え尽きたという感じである。

この研究会の成果は、ひとつにはこの報告書として結実した。しかしそれと同時に、3年間の我々の議論は、そこに参加した個々人の内面へと不可逆的な刻印を残して、そこで増殖しはじめているはずである。これから我々ひとりひとりが研究を継続してゆくときに、それはいろんな形の栄養分に姿を変えて、我々自身をささえてゆくことであろう。これこそが、この共同研究のいちばん大切な成果であると私は思っている。

もちろん、一般の読者が本書を読まれても、そこから様々な視点を得たりや刺激を受けることは確実であると私は信じている。とくに、本書の諸論文から立ちのぼってくる独特の「パ

ワー」を感じていただけると幸いである。そのパワーは、研究者として完成する以前の若い時期の知性と色気から立ちのぼってくるのであり、そもそも共同研究とは、一人前に完成する直前のまだ柔らかな知性同士を混ぜ合わせたときに、もっとも豊かに成立するものなのだ。

最後になったが、この共同研究の代表者であり、国際日本文化研究センターでこの研究会を成立させるのに決定的な役割を果たしてくださった早川聞多助教授に、心からの感謝を送りたい。ありがとうございました。

生命と現代文明・研究経過一覧

1993年度

第1回研究会

早川聞多「研究会発足にあたって」

早川聞多「生命と現代文明への問題提起」

森岡正博「生命の選択と搾取をどう考えればよいか」

鈴木貞美「大正生命主義とは何か」

第2回研究会［重点科研「文明と環境」と合同で開催］

原田正純（ゲスト）「水俣病の医学的、社会的研究―水俣病の真の原因は何か」

石牟礼道子（ゲスト）「文明の母層・その自然―水俣より」

ロディカ・リヴィア・モネ（日文研客員助教授）「原田、石牟礼両氏へのコメント」

山折哲雄「〈いのち〉の宗教学―食べることと食べないこと」

第3回研究会

永井良和「〈有害環境〉という思想」

佐倉　統「人工生命は現代のフランケンシュタインか？」

カール・ベッカー「生と死が出会うところ―臨死体験からQOLまで―」

森岡正博「1980年代の生命主義―ニューサイエンス・エコロジー・いのち論」

第4回研究会

鬼頭秀一「遺伝子の神話と分子生物学の思想」

上田紀行「いのちの〈かけがえのなさ〉について」

横尾京子「QOLと看護―患者の権利の観点から」

村瀬　学「奇形論―グロテスクの概念をめぐって」

第5回研究会

戸田　清「第三世界のエコロジー思想」

鎌田東二「生命／自然／霊性／魂」
武井秀夫「こどものいのち、おんなのいのち—アマゾンという価値基準」
正木　晃「生と死の図像学」

1994 年度

第 6 回研究会
中村雄二郎（ゲスト）「〈臨床の知〉から〈汎リズム論〉へ」
早川聞多「浮世絵春画論」
テーマ討議：「セックスと生命」
問題提起者：鎌田東二、正木晃、井上章一

第 7 回研究会
討論会：「生命と看護」
報告者：井部俊子（ゲスト）片田範子（ゲスト）志自岐康子（ゲスト）
宮地尚子「死をめぐるポリティクス—医師の告知言説」
佐伯みか「医師の終末期医療観— 46 人の医師への interview から」

第 8 回研究会
後藤弘子「誰に子どもをもつ「権利」があるか」
立岩真也「自己決定がなんぼのもんか」
三石稔憲「哲学と社会の新しい関係—方法としての技術的な見方」
吉岡　斉「科学文明の解体過程について」

第 9 回研究会
土屋貴志「人食のどこが悪い」
池田清彦「生命の形式—時間と恣意性の生物学」
村瀬ひろみ「仕組まれたセクシャリティの悲劇—AV 女優・黒木香の場合」
森岡正博「癒しとしてのロックンロール—尾崎豊における〈生命〉と〈宗教〉ver. 2」

1995 年度

第 10 回研究会
特集：差別
柴谷篤弘（ゲスト）「〈差別〉の扱いかた」
鈴木利廣（ゲスト）「薬害 HIV の構造」

第 11 回研究会
特集：フェミニズム

金井淑子（ゲスト）「フェミニズムと身体性」
永田えり子（ゲスト）「人権論の限界」

第12回研究会
要田洋江「共生システムの原理を求めて」
坂田昌彦「現代版・看取り結社の構築に向けて」
生命と現代文明・総括討論1：「共生とは何か」
問題提起者：上田紀行、森岡正博

第13回研究会
特別シンポジウム：フェミニズムと現代社会
キャサリン・マッキノン（海外ゲスト）「ポルノグラフィーと平等」
生命と現代文明・総括討論2
鬼頭秀一「自然との〈共生〉再考」

第14回研究会
生命と現代文明・総括討論3
全員「「生命と現代文明」で問われたもの」
森岡正博「人間の生命の3つの本性と生命の欲望」